



茗會文話

五

增 5
489
5





茗會文談卷之五

目錄

- ① 新音
- ② 和歌の名所
- ③ 姪肆戲場
- ④ 人參
- ⑤ 鹽梅
- ⑥ 賣藥
- ⑦ 永樂錢

- ⑧ 和語
- ⑨ 方士
- ⑩ 誕生
- ⑪ 後詞
- ⑫ 開元錢
- ⑬ 經濟學
- ⑭ 西番
- ⑮ 臨時祭
- ⑯

- ⑰ 對馬國守
- ⑱ 長歌
- ⑲ 唐太宗
- ⑳ 陽明學
- ㉑ 主稅
- ㉒ 一條禪閣
- ㉓ 源氏物語
- ㉔ 矢の根石
- ㉕ カケマクモカシコキ

②六 まほもあづけし

②七 格心

茗會文談卷之五

錦城 大田元貞才佐 著

① 新奇

朝鮮國よハ何事よよらざるは始め出す事は國王より大禁ありと聞えりるも成るかなんか子よ機智ある者ハ機心ありといつらん見るよ世の風人の俗のむらあらぬハ皆此機智より起るより少く才ありて利をむさぼるものゆるす此機智を用ひ事あらんよ

始め出すより農家は用ひたる籾を千石をほく
といふものハ近き頃より始まり其以前ハ籾
を管までふき箕で簸りいま此器を用ひ
ぬは其功倍する也とせりて是よおとく
古へ管箕を用ひてそのすみよぬハそれありす
るせとるをよき此新器来ぬハおのづから用ひ
ざればおとくはぬ勢ひもあなり

あぬをねてあぬは我國の往古外國の教の
入来らぬ先もよく治まりよく治まりこれハ

制度文物もおのづから出来るといふと出来
らるるうちハ外國の教入り来るとも幸ひも
てぬれを用ひ玉つりよほ籾を千石をほく
おとくも

② 和歌の名所

新撰六帖の歌よ

ひつ河のきくよほほつるかは櫻

ちよろそ春のちちめ子りけれ

又

あふそあるむゆの、里のやは櫻

花をいこきて折る人もあし

とよありるれひつ河ひゆの、里はゆるすしゆ
かえ櫻のありてよあるまあらすひつせいひん
それせいふより趣向をねるしとぢめらひ折
るせいふ縁語をおめしのは櫻とよあるそ

今郭公を詩哥よよまんは待兼山ちちめらひ

らたある趣向はいぢすまつをの浦松尾山まつ
をの山あんどほど、ぎすをよと来らねて是よ
てよまば趣向も出来てよとれを法禁の定まり
とれはほくぬま、まよひくらす

③ 姪肆戯場

ともよ正くらぬらちねて姪肆に客居の人又
ハ少壮のものの情をやりて大ある非礼をせぬ

いふ取り所もあつし戯場ハ何の事り所もよ
く世の風俗をそつふふ事あり殊に婦女子是を
見て其さまよおのけ形をうつし心をととみ
む

されど俗人の好い見るハ咎むべきよとらぢ心
ある人の好い又ハ妻子をゆるして見せしむる
ハいらんぢや

姪肆よつきて尤怒ふへきに齊桓公の時女官七
百あり皆やもめを用ひ其証を取軍用よ供すも

あり是功利よわぼれて廉耻を捨たるあり王者
正しき政あらば軍用ハいつくよりも出づし西
域の龜茲于闐の国々も女肆を置てその錢を
征すて見えしり是まゝ夷狄のする所論するよ
足らず

今の世人家の子弟多く放蕩して身をうしあひ
家を破るるは是より起れハ是ももつうれふと
まゝ

④ 人參

朝鮮人參の上品あるハ金六七兩をもて參一兩
を買ふあり此一兩ハ四加三分あり古ハ勿論後
世もあつたき價ありて死すき病も
人參をて生へきもあふあろふある心より
らあり行ありみより人參を用ひて生へき命
の死するを知らざるもや

朝鮮人參の日本に來れる其始めは史に見え

るは聖武帝天平十一年に渤海國王欽武使を遣
し大流皮^出羅皮各七張豹皮七枚人參三十斤蜜三
斗を獻すて見えり渤海國ハ高麗の後にて朝
鮮のうち北よりくる國あり大虫ハ鹿あり唐
の内唐帝の祖先の虎といふ名をいふて付くる
名あり

⑤ 鹽梅

あんだいといふ詞は即阿ぢはひといふ詞の轉
じろより鹽梅といふ文字のあんだいといふよ
るよよりてさうきまの是とあぢり又
安排といふ別のより此類多しとさう柳
とあひ柳より枝垂柳と文字をうめるとは誤り
あり

⑥賣藥

津逮秘書中は杜五郎の傳あり此五郎賣藥を
いさあこちけり其郷は家業をさうあひて
貧しくありたる多し醫者もさうあり五郎賣藥
ハ醫者のためは害する事あり我ハ子ありて人
の爲は田を耕し我をやさう飢るとさうて
て賣藥をやめたりとせん是ハ趙宋の本のそ
あり

今の世醫者の多しあり也故其術もわろそ
に其上外国より年經て渡り来るる庸才とせん

一撮スウリは調一年ころの痼疾天行の大疫を
治さんちすあるあまもるもりより験まけ
ゆは人參をとのうて万一を僥倖す是術のつと
あまよめる術のつとあまに醫の多きはよめる醫
の多きは産業よまほくまゆふあるも

⑦ 永樂錢

ある小説は足利義持公の時代相摸國は唐船

漂着す毎は永樂錢數百貫あり是を東國はひろ
めらふ、鑄七いふ錢を並らに用也永錢一文は
鑄四文をあてりり慶長十年七もは停止せらる
永一貫文を金一兩七とて二百五十文を金一步
ちすといり
今東國にて租税を収むるは永錢の法あり此遺
風あるも

八 和語

和よそやまも七歌は人の心を種ちまゐるあらひふ
ればいりあるいやしきものもよむべきとをも
よりよりさぬを万葉をえぬ撰集は農工商賈
の哥ちて聞えぬは先ハ士大夫以上のもの七覺
ゆるこ

いし〜士大夫以上ハ各自ら才学あり哥をも
て一家よ名つけり後世喪服乱以後士大夫あら
ぬ人風雲の會よ兼し時を得て国郡の主とある

又衣冠の身そりてハ風雅の事もうらやむ心
ありさぬを和漢の才学ふくと豪放を任せと
どりある哥をよめる故道ある人則ち連歌の
法を立られらるゝふるへし

又俳諧といふも風雅の類あるも二三の作
者をおきて其他漢字の吟咏漢字はさら
りのあやまりし和哥和字よ辨つぬ人さながら人情をば
思ふをやすきえりいよらんちまれ七一
向ふ詞の何をもあまらず俄よ之れをとく

由あらぬはるめよりよしありさしふより當
時鬼語の如きるいふ世は顯はるし詞のあ
やを知りしる人におのつらうその如くまは
ひ出さぬす

⑨方士

唐の李抱真に戦功多く名將のほまれあり只不
学あまふえ方士の説あまむひていふ吾やけ

天は昇るべし人々も對面するも久しうらむも
いふ丹藥二藥丸を服す是より朝夕の飯を食す
るも能はず次第もやせねちらへ死せんちす
妻子悲しむあみて醫藥をたぐめや、快き時方
士来りていふやがて仙人もあまよまよいらて
りらするやせいふ又藥丸を服して死まけり抱
真が心は死する時も尚仙藥のそとぬせむも
ひ方士もわらひあし思ふき其たし世の祈
禱願勝を信する人おほやうるぬえ

⑩ 誕生

人の生るゝを誕生といふるも何の出るる所
あるをあらう此るる黄溇の間に今古録といふ書
を閲するよんいんて世人称生辰曰誕辰因詩經
誕生后稷而云似無意義もあり誕といふるも生
るゝの義ふけぬはうらうら
今日本まては

天子の生れさせ玉ふまかざりていひあらはせ
り又其初をあらう

⑪ 被詞

はらひの本意ハ過馬をあらうめくひすま
くまらるるよりはらひハ洗ひより身心のけかれ
らるゝと洗ひすくまて清潔あらしむるの 義あり
補いさぎよき所よりまらうまらうもの入来らぬ

ひちしほえきり原のちらひ是なり

今の人ハ教ハ祈禱モ心得僧の何經を誦するも
如く中臣の祝詞をいくとびもちあへ以来福の
来らず福をまぬくとよりちす笑ふも其上中
臣の祝詞ハ六月晦日十二月晦日三らむより群
臣の過言をえらひて明朝より何らとあをぬ
させ玉ふ得趣ハ音より出さるは事すれハ唐人
のミどり用也にまよあらず

⑬ 開元錢

開元錢の真あるを火過すれハ水銀出るあり小
児の驚風を治して驗あり也書部に見えり

⑬ 經濟學

何よ人そハ經濟の學とはいふ事や答へ
ていふ知り侍らず ~~經濟~~

經濟ハ學者の任する事也承る事知らずとい
ふに 學者の任する所ハ已を脩め人を治むる
事也聞侍る經濟也やうありうましく名目とく
て、いふよなはる經濟の文字ハ聖人の常經を
もて民字義を教ふとの心あるべし
其經術をもちて民を濟ふるべし ぬるべし
よて經濟を説く書あましくあらうて づんじ農
うと河うと地うと金うとちもの有司の心得に
まろちをいつり是らハいつらうもるんくの

職あるべし人ハ其術をかあふすは其中よ
ちり分てするべしとを撰とあげ玉ふとすうの
遷豆の事ハ有司存せりの類あるべし學者の庶
幾する所聖人の經濟といはに修己以安百姓を
目あてちし敬事而信、節用而爱人、使民以時ちあ
る根本よ志し其君を善よ納んちする事り孟子
只大人為能格君心之非一格君而かとす此所誤
脱あり
ん先君側よ仕ある人をえらみ人のある事ほも
の才を用ちしとよ知君を、猶以てよ水を初

ちまうし知らば君の御心よろしきまふらまうし
是ハ捨置只事の上のこりてすぬハよろしきま
ぬはあしきまをいふはりの有司の職より宋の
王安石政をとり様々の新法をほめぬぬれ經
濟の学をよくすも思ふへけれどこちま天下
の害をよしとり神宗帝のころ王安石よあはは
れ玉ひ邪ふる故朝廷の君子を皆退けて安石よ
誦ふ蔡京呂惠卿あむふ奸甚の人をよし
思ひあけ用ひ人民を塗炭よあしき終り夷狄

の乱おこり崩せられて僅三十年ほり^{より}過て天
下を失つりこれ若心よ安石の非を格あしきを
知らず只功利の心をよてえろくもさいくよ治
んせし故こちま一人の身に飲食を節し食
をつし元氣を保ておのづから疾病あし
藥物針灸をとのますゆし外邪ありても大ひ
ある害よまらざる然れハ人君を無病よするこそ
学者の志すところあるべけれ此を外しこの
經濟ハ實に知り侍らざる

④西蕃

北畠准后もろろしより又水を^東外夷といへばこ
れよりもろろしを西蕃といふを宣つりせしや
蕃ハ藩と同じ人の家ハ屏ありてぬせきとある
よ喻つていふ言より

己か國往古よりもろろしよ使を遣はされ留学
生と稱してもろろしよ此は^此止まりもの習え

世玉のそと世々絶えずとりて礼樂刑法醫曆占
ト元冠器物文字詩賦皆もろろしより習ひ来れ
り我國王の法制を立玉つるを六國史ハ詳ふ
り然れは唐土はわづ國の師より仁明天皇のみ
こそこのりよ唐の帝して大唐の天子との玉ひ其
書簡と大唐の勅書とあるされまゞて唐も
のこゝにあるさずゆらす大唐をいつり延喜式よ
もろろしへの幣物をとるす所ハ大唐王と標せ
り是等大いし君とて尊はせ玉ふり歎ふを

いらよ名分をさしむばして西蕃といはんは理
りともいひうらむしむせより日本の藩屏ともふ
らず又近世の儒者に由ろくを中華中國と稱
す然れに己の國を外夷とし自ら阿多んし居る
あれは是を誠は名分をさるるげあり和文を
みよろくしつひてよけれは漢文をわく時
に漢といひ唐といひては劉漢李唐の代に混
て差別しうらむし列ふよもろくをすて名付
て齊國といひ尔是は齊州ともつり是もろく

この異名よれは是を用ふも可きり兩本林芳
洲橋窓茶話は是を用ひるり然るは是も列國の
時の齊又南朝の齊よまきんらはし乎始ら
るすらるす
おもふよいよへより用ひ来れる如く漢を用
ふつしよまきは志を其の行文の模様あり
いうやうもこりちほよへし明史真臘國の傳
ふ文に唐人に諸蕃呼華人の稱まりてもこり
とれにもろくを唐といふはひろく通用の詞

あり

⑮ 臨時祭

公事根源より八幡臨時祭は平将門が乱逆の時祈り玉ひけれは八幡大菩薩よりつから将門が首をまり玉ひけるてふん其報賽のために行はる、祭ありてあり神の冥助はさるるち手れせぬのといひては秀郷あとの諸将命を捨て朝敵を

滅すといふづら事ありまづて朝敵あたる皆神のいりたりぬを武将たる人ころを盡さず解体すま

然る朝家の為はけりあん是皆巫祝浮屠のいひ出せるるちあるを禪閣ほの人の書よ書あらはし玉するはいんそや

⑯ 諸藝云

かよえ人 己が藝よほるるに皆上手といくらぬ
あり此内よに至りてはおもんぬて人をあそ
むるも何れも世よに無眼者多しとある何
ざむるる、あり實よ藝の至る人、事の理の
無窮を知る也、ありあらざる謙退す是よとぬば
諸子の説えとりよ尊大をしりるも謙下の言
あまにいまと至極の至らぬと知られり

①七 對馬國主

往古の對馬の主、あびるさうしうといふ人よ
しけちといふ所よ其城跡ありて所の人つり
て聞けり今の宗氏より以前の事よ、今も其國
人の姓よ安比留姓ありさうしう、在廳といふ
とありし

①八 長歌

仁明天皇嘉祥二年、興福寺の僧天皇の四十の御覽を祝し奉り、仙像を造り、長歌を一首作り添へ奉り

史は此を論じて云く

夫和哥之体比興為先、感動人情、最在是矣、季

世陵遲、斯道已墜、今有僧中題古語、此處必有誤脫可

謂礼矣、則平之於野、故采而載之

と見らるる

今考ふると、廢帝、仁德帝の御あるまゝ、世に哥

仙もあり、哥とも人多し、桓武帝今の京ようつろはせ玉ひてより、後士大夫皆詩文はおもひき、哥よむ人すらあし、是古今集序よ

ろ、よ古の事をいひ、哥の心をいふる人らあり、よひたり、あつりありき

といつる時、あつて、此長哥數百句あり、万葉の哥も、いさまうはりたり、漢語、梵語をあらふ用ひたり、万葉も、いさむりの長篇も、と、哥のこの題して、長哥と、あらまう、長歌の文字にて

、と始まらむ。然るに古今集の長らく長哥ふ
まらむ明らむ。短哥とあるに後人のうき諷り
か錯簡ふらむ。

十九 唐太宗

唐一代の明君あり然るは天竺の僧の長年の薬
を服し疾を生ずるも憲宗記ふまらむ。太宗
宗の事業まらむ。霸王の何をも追ひ玉りて

見ゆれば聖人窮理盡性の道をまらむ。めまねば
利ふらむ。しよりて佛法を好み僧を信し。う
る禍を得玉り。

廿 陽明学

明の王陽明の説を立らむ。皆自ら試みて
る事ゆへに。もるり。あらむ。あし。只是を聖
經に引合するに。時々抵悟する。其抵悟する

所ハ其の強辯をもちてしや。故諸儒の駁議を
まぬれず。阿はれ。聖經よらぶして。詭ねより
し。七ねゆへ。七まゝ。夫あつて。自ら一家をとつる
やうして。安うらめ。七見えり。

②主税

官名の主税をちうらとよむ。延喜式も、税の一
字も。ちうらとよあり。税ハ田畠より出る。ちうら

ゆのよて農民のちうらより出来る。ゆゑは。かく
いふ。や。礼記。有寧。食力もある。は。大夫の采邑
より出る。税を食す。も。いふ。心あり。凡上。いふ。す
人。組税ハ。農人の力ある。と。ちうら。了。め。させん
七。あ。や。税。七。い。ちうら。い。つ。と。ちうら。の。畧。する。と。七
いふ。

②一條禪閣

禪閣、名く、博物の君子あり神代卷を解し
玉ふを見れば多く、仏意ありたりて信しごと
し天照大神、始祖の陰冥神功皇后、中興の女
主といふ文あり、その前の文は吾國無二主而
為其王者日神之玉裔ともあり日神といひて又
陰冥とあり、不通の説より神孫を尊ぶとして
玉裔と辭を説かれ、何ぞ

神功皇后の傳と、日本紀は皇后の政をとりて
玉ふを攝政元年とあるされ、これに王代の叙は

ハ入るべからず、知るは女主の辭通せず、紀中と
見るは、何あぐち中興あり、事あり、三韓を伐玉
へる、只後世の多事を生せしむ

又和語の義をたま玉へるは、謬りとおぼしきあ
り、ひつをあげて、ソを、出の字の和語を不見
七釋して、いん

一書の誤り

菟道稚郎子百濟國の表文の無礼ありを、いり
り表を地はあげ足をあげて、ふと玉へるを、
ふとていふ

ちより此の事ハ日本紀ありとて其表を破るて
の事あり足るてふに玉ふてハあは然れハ野人
の妄説あり表文の内ありとらぞの御事もある
べしみるその篤厚ありたるとてふまきとの
ありマけんや

ふえといふハ元來ハ文の字をよめるに和語ハ
この一休あり蟬の字の声ハせんふよと和語ハ
轉してせいといひ又和語ハてほをそんていふ
ミてもいひ下草の哥よとていひてよぬんといふ

をひてよぬいふとていふ類あり此の文の字の和
語をよて書の字もねとていふとていふとていふ
ふのこ

③ 源氏物語

世人の阿まぬく見る書かれに見ざるも吟ら
の吟ら又けれハ一閱し侍るハ其桐壺よりけ
めてまぼろしめて終る皆まぼろしの如くも

實はあらぬといふ事とす

次の雲隠れより詞をいし源氏のまじりてその罪惡
あらはれて終りのよろらぬにあらざるは君にす
といふ心あるべし

又旬宮の巻より始りて夢の浮橋をもちめり
り皆夢の心とらるる真はあらぬといふを知ら
せり

金剛經の一切有爲法如露亦如電如夢現泡影よ
り名づけしは旬宮の巻より作者あらざるなりとす

て作者の主意あり中より撰関相國の任ハ
皆執柄家もあり皇子とちりみく左右の大臣は
至り玉ふ其他ハ皆官称のあるまじり又僧と
あり玉ふも多し御孫に至りて世よりすまら
ぬ是を思ひて光といふ皇子夕霧薫よせの
玉孫を設けて權威あらむ

又立后の事第四十二代文武天皇淡海公の御娘
を后に立玉ひ聖武帝を誕生し玉ひてより後他
姓の后もより玉ふる檀林皇后の他姓の女

御更衣の皇子ねけしとも中宮もあらざるを
藤氏の之后七まり玉小藤氏もては庶氏もては
あらざる是を思ひて源氏の女子をおほく中宮も
せり

古の頃春日のおほん神の託と称して藤氏あら
ぬ后に神の心よりあはすといひあせりゆりて
乙女の巻よ源氏の打ちきりて后よ居ともはん
と世の人よりききえすともけり知るま古神
武天皇日向の吾平津姫を后よ玉ひりゆり

御代々もろくの姓よ后よ立玉小さね七春日の
神の怒りを聞ず凡そ代々の帝の内よ聖武帝ほ
ど仙神を尊崇し玉ふはあし又天変地妖風旱
疾疫叛逆姦人の多く出るといふも藤氏もたり
ても房前公豊せんとより磨呂卿本書の武智
麻呂卿宇合卿卒し玉小春日御神の御子孫の御
腹より降誕ありし聖武帝の御時よれに神慮よ
めあひしりくにあるまのまよ何らすや
又貴家の子弟は皆小児より高位をぬにわのつ

うらねざりとうふり才徳のふけぬにゆふぎり
を六位より昇進あらむ

又淫風の甚たきをいままゝなり源氏おほろ
の事より起り無実の讒言行はれ須磨は執事居
ありしを帰京の後よりもせず又ねほろよみえ
うとありしありいうあるいろこのこゝ彈指す
べし尤甚としきハ藤壺の事より須磨あてや
ほよろづ神もあはれ七思ふらんあやせる罪の
ふれもふけぬに七よありしは俄は大風大雨よ

て此世もつまぬへき変をかけり中臣祓子七
母七あやせる罪もあり藤壺ハ母の位の人なり
是は通せられくるハ誠は母を犯せるつゝある
を罪あきせよめぬにうく天神のいうりあしく
大変ありし七いふ心をかきあしり

尤婦人の淫風をいままゝなり人の妻妾をし
二心ありて源氏は心を通しる女はみよ尼よ
あしりその尼よよりくるを見て實は源氏は
心とせらるるをあらはし是筆談のころるふ

リ
又作者のて、ろよ女の漢字何ふとよくあり也
為よひるくひの事をうきこの作ぬる詩も女の
えくうぬ事まぬふはよんき事をうてはぬは
わううつあせいり

又公卿の間は漢字のねちろへくうをうぬへ也
ふまりを入学させ博士あものせよけらせ漢字
あつてんいんゆるやませどまゝぬのせよ用を
あきぬせいぬをしうせり

又受領の廉潔あるに貫之のどせん土佐のちん
、歸京のとき銭あくて米もて魚よりくぬぬ
り此ものくくりあり受領のちんさうへて寶多
くもてるを所々よあるし置り
あぬらあふふあきあたらす
定家卿の此文に詞華言葉をもちあふべしと
はよくやあらうよ宣へて作者の主意に明らぬ
らぬちいしくし
然るは此書をまける注汗牛充棟な及べせもと

い三つがひちつうあていふちを大事として人
情俗態の教七あよぐき事ハ得見付す
さて此句の巻より浮橋止ハ大武三位のうまつ
きころゝみて源氏の後篇もいふてし見る所ハ
皆前篇よりあり

⑥ 矢の根石
津輕秋田あとりより矢の根石といふものを出

す鳥の古といふ鑱マキに似たりあうてちあほくま
所もウリまこふるもあり色ハ黒も紫もあり又
白黒まじらふるもありかの蕭愼の石怒りあもい
ふ類あり

昔承和六年八月出羽國海濱霖雨やまぢ隕る
石ありありハ鑱に似あるハ鋒に似あるは白く
あるは青く赤く其銳体皆西向ちあり元慶八年
も此事あり是矢の根石ふるても銳りたる方
西よ向りて西風のえげくまぢ角ある方風

よさうらふゆゑあるは是は其の阿蘇の山
崩れ風節よて飛来りたるありそのころ奥州の
夷賊おそりしとあり神の軍を起してなほせ
とまるとその矢ふよりせいふ説も見えり是
より是を神軍の矢の根をも俗よひいふはせ
り

廿五 カケマクモカシコキ

古語よかけまくもかしくきといふ詞ありかけ

まらせいづるに何をかけるるそそ妻き註も
あしおゆあよ今の人の詞よ口の端よかけるそ
いふかけるるは万葉集の哥よ

いもせいへはあへくしるるをうらま

うけまくあしき我くもあまらま

そよめりいもに妻をいふあつしは無礼まりり
しるはむいかりおそるべきよりあらすかよ
ハあらすほちいかりをこし此哥貴家の女よ
そあひひしてあるんそが妻せいなんハはらか

リきぬをろろろろろろろ我妻を口のちよけて
いひとき我ろろろろちよけ

又

秋山をぬぬ人ろろろろろ
其紅葉のおもほゆるも

④はほもちがけし
万葉の歌は海上の天氣のはぬてよきを

はほもちがけしはまよみはよくあら
し

あせよあり今の人いづくも天氣のちきを
あほをいぬに誤り日和の字を用ひてこの文字
の心ちおもへるも誤ぬり

又

清き瀬よちちりつまよふ山のちよ
かすみろつらんろろあひのちり

又

阿さうすみうひやう下よふくはり
ともありまれうすみを冬も夏もよみたり
是うすもいへて又て空中のもやくちし今いふ朝
やけ夕やけの類より春の霽氣をうすみをして
春よりぎれり後世の制より
又万葉よ

うゝたて神

ちいふ詞所々よ見えたり諸説も用ゆるもく
らず余古事記七延喜式ちよよりて正説を見出

しより別よ記す

⑦ 格心

孟子曰格君心之非、孟子戦國よ生れ時機に應
ずる言語あるゆゑ孔子をうぬりて非毀する
人多し是皆孟子の皮膚をくぬきの我しに
格心の一語ありて其学の孔子よ異ちらざるを志
ゆり若心の非を格さずして只己の上よて傾く

をさくへ倒るゝをさくけらるゝのさくしてハ齊の
管仲が桓公を助けしよりよりして管仲死すれハ
その儘齊の紀綱を亂れ桓公卒して尸虫戸より
出て諸公子阿らるゝひんりり諸侯をひきて齊を
せむむあさるゝなり

此格心の一語即ち先王の教法ありて大學のより
て作る所あり淳薄ある人古の説を聞は是老
生の常談ありて仙老の緒餘ありて契あり移し植
とる草木を見るより其根とく土よとくみつま

て後枝葉出つ人の道亦如斯ありて先をのれ
を治めて後ものよなふ是本根を固するの言ふ
り

